

叫び

一九八五年のある日、二人の姉妹が老母を伴ってらい病棟を訪れた。三人ともチャダルで忍者のように顔を覆い、初めは誰も寄せ付けなかった。

スタッフが説得してなだめると、恐る々々ぼろぼろの紙片を差し出した。見れば、以前にペシヤワール・ミッション病院のらいセンターが使用していた登録カードであった。かすれたインクの字を判読すると、八年前の一九七八年に新患者として登録されたアフガン人たちで、治療中断していたものである。

別室でチャダルを取らせると思わずスタッフたちも息を飲んだ。妹は三十歳にもならないのに鼻筋が陥ち窪んで顔面が変形し、手指も鷲の爪のように曲がっていた。らい反応で全身に潰瘍化した膿はうがあり、まるでぼろぼろの皮膚をまもっている骨格に見えた。無残な姿だった。登録当時、非常に美人だったというが、その面影もなかった。

二歳上の姉は顔の変形は免れていたが、頭髮は完全に脱け落ちていた。母親は右足に大きな火傷があり、壊死を起こした皮膚は悪臭をはなっていた。

彼女らの出身はクナールという、国境に近いアフガニスタン領内にある。彼女らもまた戦争の犠牲者であった。ソ連軍の侵攻で内乱が本格化したのが一九八〇年頃からで、当時クナールは激戦地の一つであり、数十万人が難民としてパキスタン領内の国境地帯に難を逃れた。



1987年当時の難民キャンプで、水の配給を待つ女たち



兄弟の多くはムシャヘディン・ゲリラとして戦死した。いとこ数名に守られてバジョウルの難民キャンプに身を潜め、ペシャワール行きのパス賃さえなく、辛うじて配給の食物を得て生きていた。もちろん、一年分のらいの薬も飲み尽くしていた。

病勢は少しずつ進行していった。妹のハリマの体全体に吹き出物ができ、高熱と全身の痛みでもはや耐えられなくなった時、同情したキャンプのゲリラ指揮者がペシャワールに送りつけて来たのである。

彼女らは何かに脅えていた。苛酷な体験は容易に想像できたが、敢えて私は詮索しないことにしていた。このような病人に必要なのは、ともかく病を癒し、少しでも「人間」としての誇りを取り戻させる事である。第一段階は、ともかく餓死の危険がなく、出来る限りの治療が保証されている事実を分からせることである。人間が極限に近い苦勞の痛手から立ち直るのは時間がかかる。べたべたと優しくするよりも、泣き叫びを放置して思い切り心の膿を出させる方がよい。事実と結果が最も雄弁である。

こうして彼女らは少しずつ快方に向かっていった。——と述べればいとも簡単だが、狭い病棟にひしめき合う中で、気違いじみた叫びは、スタッフにも私にも他の患者たちにも大変な忍耐を強いたのである(後に或る外国人が来て、「病棟の無秩序と悲惨な女性患者の境遇」を嘆いたが、私には即座にその意味が解らなかった。瀕死の野良犬が人間に立ち直るのを大きな希望で見てきたからである。一般にゆとりのある現代社会で育った者は、緻密にカミソリで木の皮を傷つけて得ても、大ナタで幹を切り倒すダイナミックな感性に乏しい)。

半年後には母親と姉の方は小康を得て退院した。すっかり笑顔が戻っていた。ここで話を終えれば感動的な治療物語になるが、それでは彼女たちの犠牲が伝わらない。

